

斎宮群行一日目の行程を歩く——六条御息所の逢坂山越え

井野 葉子

はじめに

大学院生の落谷雄輝さんと岡元文音さんである。私も含めて総勢九名の長い道のりの記録をここにいささか残しておきたい。

二〇一九年三月九日、斎宮群行一日目の行程の現地踏査を行った。

一 『源氏物語』と『春記』の記事

斎宮は五泊六日の日程で都から伊勢の斎宮まで下る。その一日目の行程、すなわち御櫛の儀が行われる大極殿（八省院の正殿）を出発し、逢坂の関を越えて打出浜あたりを通って、勢多頓宮のあった近江国府まで、その全行程を歩いてみようという企画である。その距離たるや二十七キロ余り、はたして歩けるのか自信がなかったが、参加者全員が遅れることなく完歩でき、斎宮群行の行程の距離感やスピード感を体感し、『源氏物語』の六条御息所の逢坂山越えの場面に思いを馳せることができたのは大いなる収穫であった。二十七キロを一日で歩き抜くという無鉄砲なこの企画に参加してください

『源氏物語』の賢木巻、六条御息所が娘斎宮とともに伊勢へ下向する場面がある。大極殿における御櫛の儀式から始まり、八省院を出発した一行が光源氏の邸宅二条院の前を通り過ぎ、逢坂の関を越えて去っていくという場面である。

たのは、平安文学の研究仲間の池田大輔さん、大井田晴彦さん、亀田夕佳さん、藤井華子さん、松浦あゆみさん、村口進介さん、本学

心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の刻に、内裏に参りたまふ。御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し心ざしていつきたてまつりたまひしありさま変りて、末の世に内裏を見たまふにも、もののみ尽させずあはれに思さる。……斎宮は十四にぞなりたまひ

ける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたててまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ。出でたまふを待ちたてまつるとて、八省に立てつづけたる出車どもの袖口、色あひも、目馴れぬさまに心にくきけしきなれば、殿上人どもも、私の別れ惜しむ多かり。暗う出でたまひて、二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条院の前なれば、大将の君いとあはれに思されて、櫛にさして、

ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや

と聞こえたまへれど、いと暗うもの騒がしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ御返りある。

鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむことそぎて書きたまへるしも、御手いとよししくなまめきたるに、あはれなるけをすこし添へたまへらましかばと思す。霧いたう降りて、ただならぬ朝ばらけに、うちながめて独りごちおはす。

行く方をながめもやらむこの秋は逢坂山を霧なへだてそ

(賢木卷九三〜九五頁)

六条御息所が内裏に参上したのが「申の刻」(午後四時頃)。大極殿において朱雀帝が斎宮の髪に別れの櫛を挿す儀式が行われた時刻

は語られていない。儀式が終わって斎宮が大極殿から出てくるのを、同行する何台もの女房車が美しく出衣いだしぎぬをして八省院に待機している。斎宮一行が八省院を出発したのは、「暗う出でたまひて」とあるように、あたりが暗くなつてからであつた。「二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条院の前なれば」とあるので、一行は二条大路を東へ進み、洞院大路を右折して南下する。この「洞院の大路」が西洞院大路を指すのか東洞院大路を指すのか不明であるが、二条大路から右折して洞院大路に入る、その角のあたりに光源氏邸の二条院が想定されていたことがわかる。光源氏は万感の思いで六条御息所に歌を贈る。しかし、「いと暗うもの騒がしきほどなれば」とあるように、とても暗く、取り込んでいる時なので、お返事は「またの日」(翌日)、「関のあなた」(逢坂の関の向こう)からになった。内裏に参上したのが午後四時頃で、その後の儀式があつてからの出発で、また内裏から二条院までの道のりもあるので、二条院の前を通りかかったのは、夜の真つ暗な時間帯であつたはずである。六条御息所は、内裏に参上する時に乗っていた御輿でそのまま出発したのか、それとも牛車に乗り換えて出発したのか不明であるが、いずれにしても御輿や牛車に乗って移動している最中に手紙の返事を書くことはできないであろう。乗り物から降りて返事を書くことができる状況になるのは、途中で休憩するようなことがあればその休憩所からか、あるいは一泊目の宿泊地の勢多頓宮に着いてからかということになる。御返事が翌日になり、逢坂の関の向こうから来る

のは至極当然のことと思われる。

それにしても「関のあなた」とはどの辺りだろうか。逢坂の関を越えて下る坂のあたりか、湖畔に出てからか、あるいは宿泊地の勢多頓宮からか。歌を贈られたらすぐ返歌するのが良いとされている中で、どこでどのくらいの時間が経ってから返歌をしたのかは、六条御息所の光源氏に対する思いの有り様を想像させてくれるはずだ。出来る限り早く返歌をしたのなら、光源氏に一刻も早く思いを届けたいという気持ちを物語る。すぐに返事を出さずにわざと遠くに行ってから返歌をしたのなら、光源氏への気持ちを整理するために物理的な距離と時間が必要だったのかもしれない。「またの日」とは遅いのか早いのか。「関のあなた」とはどの辺りか。実際にこの行程を歩いてみれば、何かわかるかもしれないと思った。

どこをどう歩こうか。平安地理に明るくない私が右往左往していると、多くの方々が救いの御手を差し伸べてくださった。

まずは、飯塚ひろみさんが田中本『春記』の長暦二年九月の齋宮群行の記事を御教示してくださった。『春記』とは、藤原資房（『小右記』を書いた藤原実資の養子の資平の息子）の日記である。長暦二年（一〇三八）九月、後朱雀天皇の皇女、良子内親王が齋宮として伊勢に下る時に、資房は齋宮勅当として齋宮群行に同行し、その時の旅の様子を日記に克明に記録していたのである。現存する齋宮群行の旅の記事としてはこの『春記』が最も詳しいとされている。この記事の解説は困難を極めたが、村口さんの御助言や所京子氏の

御論文⁽¹⁾によって、何とか大雑把に内容を読み取ることができた。それによると、九月二十三日、良子内親王が八省院での儀式を終えて伊勢に向けて出発し、白川で御禊、それを追いかけるように資房が白川へ馳せ参じたのは「亥時」ばかり（午後十時頃）で、既に御禊は終わっていたと言う。続く記事には次のようにある。

亥三刻許、御輿立御白河畢、於山科辺微雨、……翌日寅時許着
御勢多頓宮、□□□□事□□人々皆有宿所也

これによると、「亥三刻ばかり」に齋宮の御輿は白川を出発し終え、山科の辺りで小雨が降り、翌日の「寅時ばかり」に勢多頓宮に到着したということになる。白川を出発した「亥三刻」を夜十一時半とするならば、勢多頓宮に到着した「寅時」は朝四時、白川から勢多頓宮まで四時間半かかったのである。白川の御禊所の具体的な場所は今となっては不明であるが、岡崎の白川の流れのある辺りか。勢多頓宮については、『延喜齋宮寮式』に、「凡頓宮者、近江国府、甲賀、垂水、伊勢国鈴鹿、壱志、総五所」とあることから、近江国府内にあったと推測できる。

また、村口さんの御教示によれば、『西宮記』（齋宮群行）にも「次於白河有禊、会坂楽、打出浜楽」という記事があり、白川での御禊は良子内親王だけが特別に行ったのではなく、通常の齋宮群行の行事のうちの一つであったことがわかる。また、近江国府へ向かう途

中の「会坂」すなわち逢坂で「楽」（音楽の演奏など）が行われ、さらに進んで琵琶湖畔の「打出浜」でも「楽」が行われたことがわかる。

良子内親王の一行が八省院を何時頃に出発したのかは不明なので、結局、齋宮群行一日目の行程の八省院から近江国府までのくらい時間がかったのかはわからない。しかし、「白川から近江国府まで四時間半」という記録が、私の心を揺さぶった。『春記』によれば、齋宮は御輿、女房たちは五台の網代車に乗っている。人が担ぐ御輿や牛が引く網代車の一行はどのくらいのスピードで進むのだろうか。速いのか遅いのか。興味がふつと湧いてきた。きちんと時間を計りながら、八省院跡から近江国府跡までの齋宮群行の一日目の行程を全て歩き、その道のりやスピード感を体感したいと思った。

二 ルートを決める

さて、ルートを決める。八省院を出てから二条大路までのルートについては、『源氏物語』の本文は一切語っていないが、『源氏物語』の注釈書である『花鳥余情』は次のような指摘をしている。

斎王乗輿出昭訓門至八省東路南行至郁芳門路東折至美福門南行
即出東掖門經二条大路東行至京極

書き下すと「斎王、輿に乗り、昭訓門を出でて、八省東路に至りて南行し、郁芳門路に至りて東に折れ、美福門に至りて南行し、即ち東掖門を出でて、二条大路を経て東行し、京極に至る」となるうか。

『花鳥余情』の説に従って歩くのも面白いと思ったが、八省院の東側のあたりは平安時代の道が残っていない。諦めるか。そんな時、助け舟を出してくださったのが松浦さんである。松浦さんは、『平安京提要』（古代学協会・古代学研究所編、角川書店、一九九四年）の付録「平安京大内裏（平安京）復元図」に基づいて、平安時代に近いルートを提案してくださった。この「平安京大内裏（平安京）復元図」は、現在の地図と平安京の地図とが重ねてあって、かなり詳細な部分までがわかるようになっていて。以下は、松浦さん御提案のルートである。

内野児童公園内の大極殿跡の石碑から出発するが、実際の大極殿は石碑より五十メートルほど南の千本丸太町の北西角の北側あたりから交差点の北側の横断歩道のあたりにかけてなので、そのことを意識しながら、交差点の北側の横断歩道を西から東へ渡る。千本丸太町北東角から二十メートルほど東のあたりが昭訓門の位置なのでそこまで行き、しかし、道路を渡るために一旦交差点に引き返して交差点東側を北から南に渡り、丸太町通り南側を東へ進む。一筋目で右折して土屋町通りを南下する。この土屋町通りは八省東路とは

ばかり重なっている。郁芳門路に当たるものが現在はないので、郁芳門路より二十五メートルほど北にある小路を代替ルートとして使うこととし、土屋町通りを南下して左手の児童福祉センターの角を左折する。東へ進むと二条児童公園に突き当たり、そこを右折して美福通りを南下する。現在の美福通りは古代の美福門路より五十メートルほど西にずれているのであるが、仕方ない。そして、美福門があつた場所から二条大路へ入りたいところだが、秀吉が二条城を作つて二条大路を分断してしまつたために、二条城の南側を回つて東側の堀川通りを北上し、一つ目の信号を右折して、二条通りに入る。これで二条通りに入るまでのルートは決まつた。⁽²⁾

次に、二条通りから三条大橋までのルートについては、『源氏物語』の場面に従つて歩いてみる。先に述べたように、『源氏物語』の賢木巻の本文によれば、一行は二条大路を東に行き、洞院大路を右折して南下する、その右折するあたりに光源氏の二条院があると読むことができる。『洞院の大路』については、西洞院大路か東洞院大路かわからないので、私は二条通りを東へ行き、西洞院通りと交差するところを二条院の候補地⁽¹⁾として確認した後、さらに二条通りを東に進んで東洞院通りと交差するところを二条院の候補地⁽²⁾として確認した上で右折して南下する。東洞院通りを南下して三条通りに着いたら左折して東へ進み、三条大橋へ至る。

次に、三条大橋から逢坂山を越えて京町一丁目の交差点までのルートについて。以下は、加納重文先生の御論文を参考にしながら、⁽³⁾

一年前に私が一人で逢坂越えをした時のルートに少し修正を加え、今回の現地踏査用にアレンジしたものである。三条大橋を経て道なりに蹴上駅の上を通過して一四三号線、九条山の交差点を過ぎて京都東山老年サナトリウムへ上がる坂の入り口を左に見てから、初めての信号の右側の小道に入る。これが旧東海道である。しばらく一四三号線を離れて旧東海道をひたすらまっすぐ行き、再び一四三号線に合流して、電車の高架をくぐつたところを左折して、再び旧東海道に入る。山科駅前を通過して、徳林庵の前を過ぎ、しばらく進むと一号線の高架に突き当たる。左折して少し進むと歩道橋が出てくるので、それを渡つて一号線を横切つて再び旧東海道に戻つて直進する。その後は、自然に一号線に合流でき、月心寺の「走井」をのぞきながら通過して、歩道橋を渡つて昼食場所の大谷茶屋に到着する。その後は蟬丸神社、逢坂山閼址、関蟬丸神社上社、安養寺、関蟬丸神社下社などの前を通過し、長安寺を左に眺め、京町一丁目の交差点まで行く。

次に、京町一丁目の交差点から近江国府跡までのルートについて。このルートについては、様々な文献に当たつたが、管見の限りではどの書物にも言及がない。現在「打出浜」という地名はあるものの、それが平安朝の「打出浜」と同じかどうか不明であるらしい。湖畔近くの水際はおそらく地形も変わっているのだろう。そこで私は、京町一丁目以降は旧東海道を使うことにした。逢坂山を下つてそのまま直進すれば湖であるが、京町一丁目の交差点を右折して、

旧東海道に入る。大津宿などを通過して、左折したり右折したりしながら旧東海道を進み、瀬田の唐橋を渡って、近江国府跡に到着。この旧東海道については、亀田さんが『ホントに歩く東海道 第一五集』（風人社、二〇一六年）を御教示してくださった。

三 現地踏査の当日の記録

当日、午前九時に二条駅東口に集合した。亀田さんの呼びかけの御蔭で参加者は予想を上回る九名となった。参加者の中に京都在住の方々が大勢いたことは心強かった。以下は、何時にどこで何をしていたかを記録したものである。

九時一〇分 二条駅東口を出発し、千本通りを北上。
九時一七分 朱雀門跡の石碑を通過。
九時二五分 朝堂院跡（八省院跡）に到着。
九時三五分 大極殿跡を出発。
九時四九分 神泉苑西端線の石碑を通過。
十時〇〇分 二条通りに入る。
十時〇五分 西洞院通りを突っ切る。二条院の候補地(一)を確認。
十時一五分 右折して東洞院通りに入る。二条院の候補地(二)を確認。
十時二三分 三条通りに入る。
十時三六分 三条大橋を渡る。

十時五一分 白川橋に着く。
十時五三分 白川を右に見て北上。祇園饅頭工場で名物「志んこ」を買う。ここより北上して仁王門通りに突き当たったから東へ。
十一時一五分 琵琶湖疏水記念館でトイレ休憩、「志んこ」を食べる。
十一時二七分 出発。蹴上駅の方へ、一四三号線を南下。
十一時四六分 栗田口刑場跡を通過。
十一時五二分 旧東海道に入る。
十二時一三分 天智天皇の日時計を見る。
十二時三六分 山科地蔵のある徳林庵を通過。
十二時四七分 左に「三井寺観音道、小関越」の石碑を見る。
十二時四九分 東海道の車石の展示を通過して、国道一号線を歩道橋で越える。
十二時五八分 井筒八ッ橋本舗で和菓子とお茶をいただく。
十三時二五分 出発。
十三時五六分 大谷茶屋に到着。昼食。
十五時一二分 記念撮影して出発。
十五時一三分 蟬丸神社を通過。
十五時二二分 逢坂山関址の石碑を通過。
十五時二八分 関蟬丸神社上社を通過。
十五時三六分 安養寺を通過。

十五時三九分 関蟬丸神社下社を通過。

十五時四二分 長安寺付近を通過。

十五時四八分 京町一丁目の交差点を右折。

十六時一六分 OLMé 大津テラスという大型店でトイレ休憩。

十七時四三分 瀬田の唐橋を渡る。

十八時〇七分 近江国府跡の西端に辿り着く。

十八時一六分 近江国府跡の一番東の遺跡に着く。しばし休む。

十九時二五分 バスと電車を乗り継いで京都駅着。その後、宴会。

まずは、二条駅を出発して大極殿跡まで向かった。九時三十五分、大極殿を出発、先述した松浦さんの御提案によるルートで二条通りに入った。二条通りを東に進み、西洞院通りと交わる所を二条院の候補地(一)として確認した後、さらに東に進んで、東洞院通りと交わる所を二条院の候補地(二)として確認して右折、南下した。三条通りに着くと左折して、三条通りを東に進む。

白川橋のあたりで、池田さんのグルメ情報によつて私達は予定ルート上にあつたお店で名物の和菓子「志んこ」を買い求めた。その後、村口さんの御提案によつて、少しルートを変更した。白川を右に見て北上し、京都国立近代美術館に突き当たったところを右折して東に進み、琵琶湖疎水記念館に立ち寄ることにしたのである。理由はトイレ休憩である。一年前に私一人で二条大橋から石山寺までの逢坂越えを歩いた時は、コンビニのトイレで事足りた。しかし、

今回は九名もいる。コンビニの一つしかないトイレを九名で使っていたら三十分以上かかってしまう。それに対して、琵琶湖疎水記念館は、トイレの個数も多く、無料で借りられる。さすが地元の方のアドバイスは違う。東京住まいの私には到底思いつきもしなかったことである。しかも、琵琶湖疎水記念館のあたりは、斎宮が御禊をした白川のあたりかもしれないので、ここに立ち寄ったことには大きな意味があつた。ここで私達は買い求めたばかりの「志んこ」をほおばつてエネルギーを補給し、東の間の休息をすることができた。斎宮が白川で御禊をしている間、一行の人々が休憩を取っていたのなら、まさに白川で休んでいる私達と一緒にはいないか。

その後、順調に旧東海道に入り、池田さんの御導きでルート途上にあつた天智天皇の日時計を見ることができ、山科を通過していいよ逢坂の関への登り坂にさしかかうかという手前、女子が大喜びしたのは、これもまた池田さんの御提案で井筒八ッ橋本舗に寄つたことである。出発してから四時間が経過してお腹もすいていた時に、お店の方が甘いお菓子とお茶を出してくれたことで、身も心も生き返るような心地がした。その後、逢坂の関近くの大谷茶屋に十四時頃到着して、約一時間ほど、昼食のうなぎを食べてから再び出発。近江の国に入つて京町一丁目の交差点を順調に右折し、十六時頃、大津市松本石場のあたりで、そろそろトイレ休憩ということと、これも京都在住の方々の提案で、予定のルートを少しそれてスーパーの大型店に入った。すると、なんとこの付近の住所が「打

出浜」ではないか。平安時代の「打出浜」と同じ場所であるかどうかは不明であるが、私達は図らずも、齋宮一行が楽を奏したという「打出浜」と同じ名を持つ場所で休憩をしたのであった。

日も暮れてきて、瀬田の唐橋を渡る頃にはどっと疲れが出てきたが、最後の力を振り絞って、近江国府跡に到着、しかし国府跡の敷地は広く、駄目押しの最後の辛い行程を経て、国府跡の最も東側の遺跡に辿り着いたのは、日も沈んで真っ暗になった十八時十六分であった。九時に二条駅を出発してから、近江国府跡に着いたのは十八時過ぎ、昼食の一時間も含めて九時間以上の徒歩の長旅、距離にして二七、三一キロの行程を、全員が怪我することなく、無事に歩いたのであった。

四 大いなる収穫

大いなる収穫があった。以下、列挙する。

光源氏の邸宅二条院について。大極殿から光源氏の邸宅二条院の候補地(一)までは私達の足で三十分かかった。そこから二条院の候補地(二)まではさらに十分かかった。内裏からの距離もそう変わらないと思われるので、光源氏の邸宅は内裏から徒歩三十〜四十分ぐらいのところ想定されているということがわかった。牛車だとかのくらいかかるのか不明だが、せめて徒歩によってでもこの距離感を体感し得たことは、これから『源氏物語』を読んでいく上で大切なこ

とであると思う。

齋宮一行が白川、逢坂、打出浜で休憩することの妥当性について。齋宮一行は、『西宮記』によれば、大極殿から近江国府までの間で、白川で「禊」、逢坂で「楽」、打出浜で「楽」をすることとなっている。この三箇所では休憩も取っていると思われるのだが、その休憩の場所といい、時間といい、まことに合理的に設定されていることがわかった。私達は白川でトイレ休憩をし、逢坂で昼食を食べ、打出浜でトイレ休憩をしたわけであるが、それは古記録の記述に合わせてそうしたのではなく、私達の体がちょうどその場所でそのような休憩を欲していたからであった。白川、逢坂、打出浜での休憩は、人間の体力に合わせた、まことに妥当性のある合理的な休憩地点だったのである。

齋宮一行のスピードについて。一節で述べたように、『春記』によれば、良子内親王は、白川を出発したのが「亥三刻ばかり」、近江国府に到着したのが「寅時ばかり」、白川から近江国府まで四時間半かかっている。私達は白川を十一時二十七分に出発し、近江国府に十八時十六分に到着していて、約七時間もかかっている。井筒八ッ橋本舗での休憩に二十七分間、逢坂の関での昼食休憩には七十六分間の時間を割いたが、打出浜でのトイレ休憩は本当にトイレを済ませるだけですぐ出発している。しかも、私達の足取りはのろのろとしたものではなく、それなりのスピードで歩いていたつもりである。平安時代の「楽」というものの、いかばかりの時間をかけるの

か不明であるが、もし『西宮記』にあるように、良子内親王も、逢坂で楽をし、打出浜で楽をしたのであれば、それらも含めて白川から近江国府まで四時間半というのは、相当速いスピードということである。馬に乗った人はいくらでも速くできるだろう。御輿を担ぐ人夫が屈強な肉体の持ち主であれば、担ぎながらでもスピードを上げることができるだろう。しかし、牛の引く牛車がこれほど速いスピードだとは予想だにしていなかった⁽⁵⁾。

六条御息所がいつどこで返事を書いたのかについて。六条御息所一行が大極殿を出発した時間がわからないので、六条御息所が手紙を出した「またの日」が遅いのか早いのかは、結局のところわからなかった。手紙を書いた「関のあなた」という場所についてもよくわからなかった。ただし、『栄花物語』に関寺の牛仏についての話があり、そこに「逢坂のあなた」という表現がある。

このごろ聞けば、逢坂のあなたに、関寺といふ所に、牛仏^{うしほとけ}現れたまひて、よろづの人詣り見たてまつる。

(巻第二十五「みねの月」四七四頁)

この記述によれば、「関寺」を「逢坂のあなた」と認識していたことがわかる。この「関寺」の場所は現在の長安寺の一部に当たり、逢坂の関を越えて近江側に下る途中にある。私達の歩みでは、逢坂山関址の石碑から二十分ほど歩いたところが長安寺付近であった。

ならば、『源氏物語』の六条御息所が返事を出した「関のあなた」も、逢坂の関を越えていけばよいわけで、近江国府まで行かずとも、ずっと手前で出した可能性もある。もともと、乗り物に乗っていては手紙も書けないから、打出浜の休憩所までは書こうにも書けないであろう。

しかし、もし六条御息所一行が白川で御禊をしたのならば、白川から返事を書くこともできたはずである。にもかかわらず、逢坂の関の向こう側から彼女は手紙を出した。それは、「逢坂」に男女が「逢ふ」ことが掛けられ、「逢坂の関」を越えることが男女の仲になることを表わすこの時代に、六条御息所が「逢坂の関」を越えることによって決定的に源氏と逢えなくなる、その逆説的な隔たりを「関のあなた」が象徴しているということなのだろう。

おわりに

旗振り役の私が頼りないところを、多くの方々のお助け舟によって、斎宮群行の一日目の行程を無事に完歩することができた。道々、昨今の大学の情況についてお話ししてくださった大井田さん、皆が疲れ切っている中で瀬田の唐橋からの最後の道のりを元氣良く先導してくださった藤井さん、私のスマホの充電をしてくれた蒔谷さんと岡元さんにも、深く感謝申し上げます。

注

- (1) 所京子「『田中本春記』にみる斎宮良子の群行」(『斎王の歴史と文学』国書刊行会、二〇〇〇年)
- (2) 『花鳥余情』の言う「東掖門」についてはよくわからなかったので、今後の課題としたい。
- (3) 加納重文「逢坂越から石山」(『源氏物語の舞台を訪ねて』宮帯出版社、二〇一一年)
- (4) スマホのルートメーカーというアプリを使って、出発地、通過点、到着地などのルートを記入して正確な距離を得た。
- (5) しかし、スペインの牛追い祭や闘牛などを思い浮かべてみれば、牛もかなりのスピードが出せるはずだ。調教次第によって牛車のスピードを上げることは可能なかもしれない。

※『源氏物語』と『栄花物語』の本文は新編日本古典文学全集、『春記』の本文は国立歴史民俗博物館がインターネット上に公開している国立歴史民俗博物館蔵田中本、『花鳥余情』の本文は源氏物語古注集成に拠る。

(いのようこ 本学教授)